

第八十二章 齐明天皇

孝徳天皇が崩御（退位）されたいま、

皇位を継承すべきであらうか。

ごく一般的な見解からいえば、当然、日皇

太子（中大兄）が即位すべきであつたらう。

う。

蘇我入鹿・蘇我蝦夷・吉人

太子・蘇我倉山田石川麻呂

らの惨殺事件が、生々しく思い起こされて、

日皇太子（中大兄）が天皇位を継ぐことな

ど、まだとても考えられない状況だつたのか

も知れない。

ほとぼりがさめるまで、さらにもう少しの

期間を必要としたように推察される。

ここに、皇祖母（皇極天皇）が重祚される

こととなつた。齐明天皇という

齐明元年（六五五）正月三日

（齐明天皇）は、飛鳥の板蓋宮において即位

4402^P-3/2

655
643
10

あまのこ
壙 → 墳 小たとは限るな
修復にかかるかは不明 紀F260⁺

さ
れ
た。
。

■ そ
ー
て、
皇
極
四
年
（
六
四
五
）
以
後
十
年
間
放
ち
ま
さ
れ
た。
。

置
さ
れ
、
す
っ
か
り
壙
と
な
っ
て
い
た
日
板
蓋
宮
口

ま
下
再
び
都
と
さ
れ
た。
。

米

4218 655 642 13 244 256 230 2斤
 4304 56 326 14 403 1104 550 538 11- 837 44106 1173 1173
 4407 1759 655 1104 550 538 11- 837 44106 1173 1173

葛城嶺の上に現れた巨大な彗星

齊明天皇が重祚されてから四ヶ月後、齊明

元年（六五五）五月一日の朝から昼にかけての出来事だった

この日の朝、全天に広がる分厚い黒雲の切れ間

板蓋宮の真上から少く西寄りには、得休の知れない

身の毛立つほどの無気味なものが見えた

その時、人々が空中に目にしたものは何であ

ったろうか。都の人々は、まったく肝を潰

さんばかりに驚いた。

それは奇怪極まりない、恐ろげな姿をしていた

顔面蒼白となった時の人は、蘇我豊浦大臣（蝦夷）の霊に違

いがない。これは、蘇我豊浦大臣（蝦夷）の霊に違

と言った。（扶桑略記）

思い返せば、十三年前の皇極元年（六四二）

蘇我豊浦大臣（蝦夷）は、己の祖廟を葛

城の高宮（御所市森脇・宮戸のあたり）に立

てて、八佾の舞を行なったのだった。

蘇我氏の本

4,404^P → 合羽 432^P 葛城郡 紀下210^P 河野 1836 ④4218^P
 九尾 一主 紀上466^P 15

に相当する

居地と考えられていたようである。(推古紀三
 十二年十月一日条参照 第七十六章末尾において既述
 其の葛城縣に聳える日葛城嶺(大阪府と
 奈良県の境の山。南の主峰、金剛山なども古
 くは葛木山と汎称した)の上とも言える頭上近くに頭
 があり、その身にまとった笠(蓑)
 及び龍の身体のような曲った尾鰭が北西の方角へ
 向かって走っていて、生駒山にその端が隠れて
 いた。
 ■そこで、

龍に乗った唐人が、青い油の笠(油を塗
 った絹製の合羽状の雨具)を着ているよ
 うだし
 と言う者も居た。(香明紀元年五月一日条)

*

「葛城の尾」という。後文に多数元について

ニ

おきみ
4408 1/2 11行に2雨夜
4,405 P

紀下326
宇6谷下185 P
井エ下241

自805
大カン71831良
タン月(にくま)で検査下さい。

紀下326 P
427 P (65)

前々頁 8行

天空に出現した

この奇妙なものトルについて、さいめい齊明紀元年(六五五)五月一日条に、
こう記されて
いる。

「夏五月庚午朔(五月一日)、空中有あり乗のり龍りゅう者もの。貌すがた似に唐人たうじん。着き青油笠あきあからかさ。而しか自より葛城嶺かづらぎ馳は去さ。及およ至いた午時うまとき、從よ於より住吉松嶺すみのえまつみね上のうへ、向むか西にし。

大略、次の解釈を述べている。
通常、この記事は

夏五月一日、大空に龍に乗った者が現れた。容貌は唐人に似ており、青い油塗りの笠(雨衣や蓑にあたる)を着け、葛城嶺より馳せて、膽駒山に隠れた。正午頃に住吉の松嶺(松嶺という岡かという)の上から、西に向

って馳せ去った。
これを要約すると、
葛城嶺から馳せて、生駒山に隠れた者が、正午頃に再びその姿を現れ、住吉の岡の上を越え、西へ向かって馳せ去った。
ということになるのか。

247

4412 7-8行

33

④4409⁷-3/2

④4408⁷-1/2

もーもそうなら、全く奇怪な話である。

なるほど、不可解極まりない記事ながら、
あるいはもーかいたら、それは、突然出現し、明るさや形を急激に変えるので、古来わざわいを振りまく不吉な星として恐れられた。彗星ののこで、あつたかも知れない。

■我々は、普通、彗星といえは、
へ一点から後方へ向かつて火の粉を散らしたような細長い一つの尾を持つ星。

を思い浮かべる。

■しかし、彗星の典型的な姿は、第④図に示すようなものであり、その構成を分解すると、大きくいって、
①頭部はさらに、核と、そのまわりをとりまくコマ（髪の毛の意味）の部分に分けられ、
②尾部もまた、タイプI、タイプIIに分けられ、
③真直ぐな尾で、ガスから成ると、タイプIIの唐人の青い油に相当する幅広（先か曲がった尾で、ダストから成る）と呼ばれ

4,407^p - 1/4

・カラー

・青色が重要で
[※少々濃いめのブルー
にしておいて下さい。]

・右頁の上半分に
限度一杯はみ出に
大きく掲載下さい。



1976年3月

↓下義

13QG

14QG

写真図版 696 太陽の反対方向へ2つの尾をなびかせる彗星(ウェスト彗星)

『彗星大接近』^{ふじいあきら}藤井旭、偕成社、2002年4月発行、4頁参照。

12QG ^{にくがく}1976年3月、肉眼でもはつきりわかるほど^{あか}明るく、^{ははひろ}幅広い尾を^ひ引く姿を^{すがた}見せた。

H9.3.4 TV

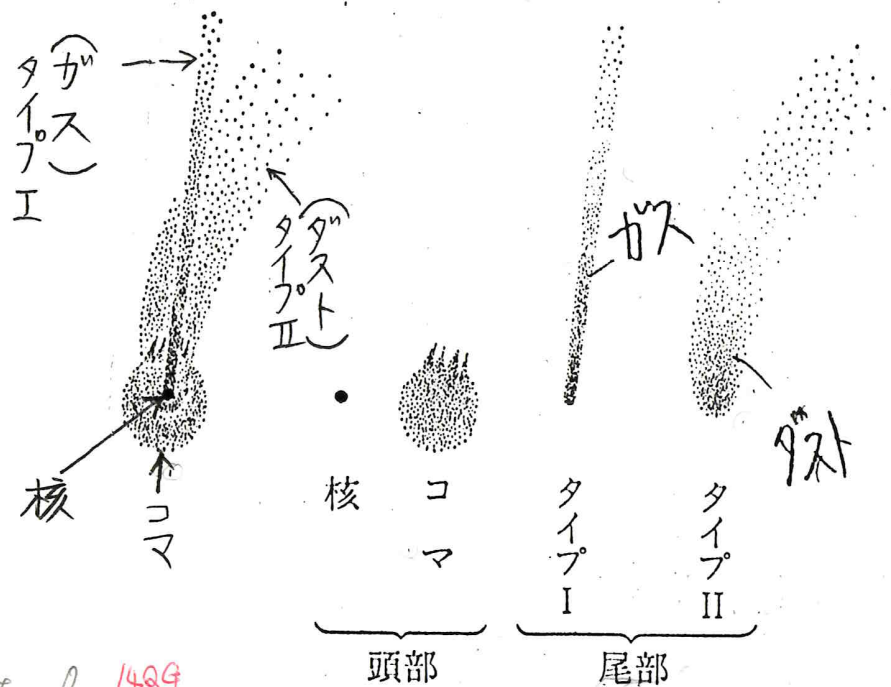
彗星接近のコースで、

この画面を
放映していた。

4,407^P-2/4

・右頁の下半分に、
大きく掲載下さい。

- ・背景のヨゴレをトリ。
- ・文字を全て、
ゴッパにして下さい。
- ・矢印をきれいな
線、矢にしておいて
下さい。



中心のりわけ
13QG

「富」でない!

14QG

第474図

彗星の構造

『彗星の話』 富田弘一郎 岩波書店 1977年10月20日発行 143頁参照

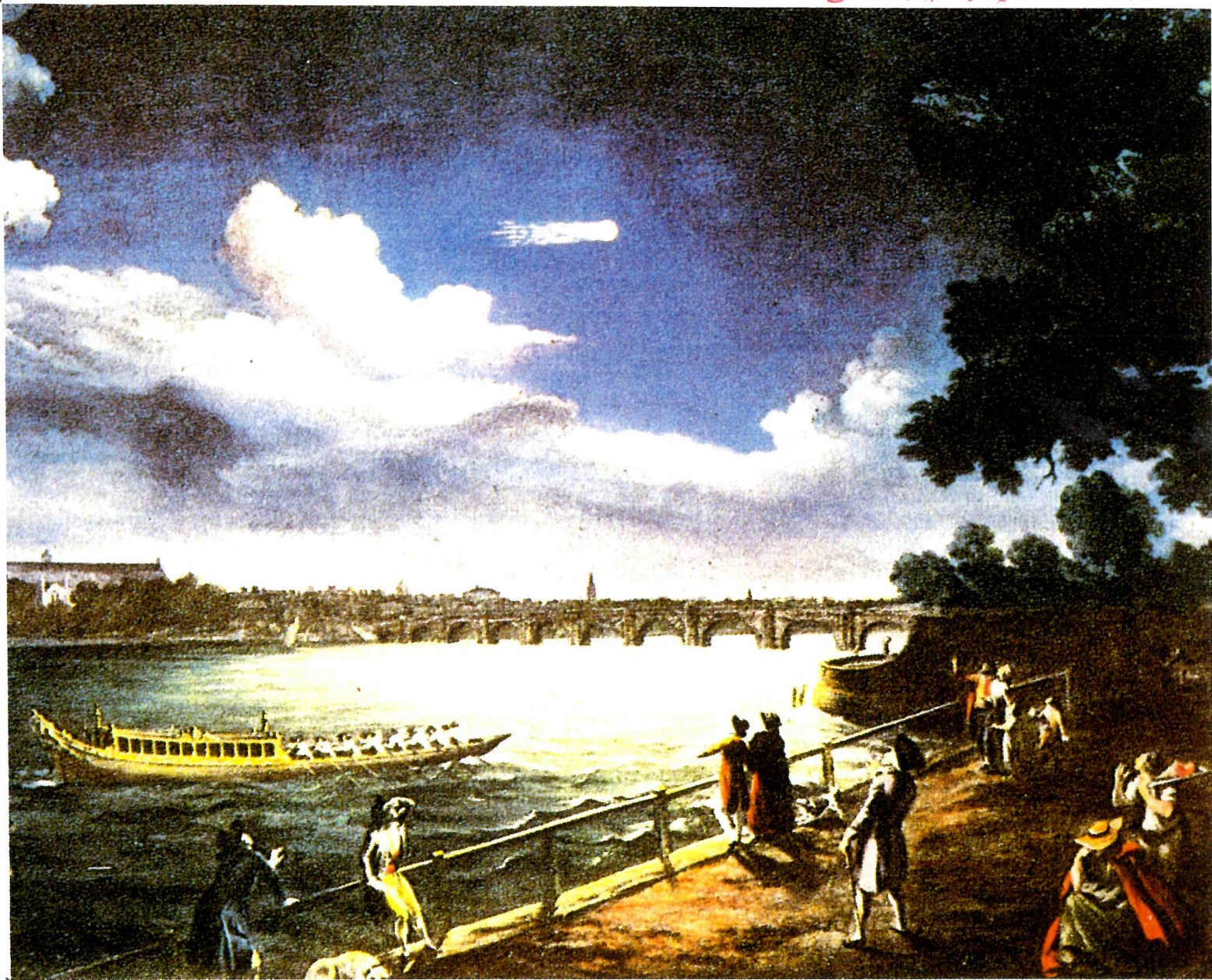
天武13年のハレ-彗星 5145^P

4,407P-3/4

←黒雲が重要です。カットしないで下さい。

・カラー

・左頁の上半分にはみ出して大きく掲載下さい。



・著作権許諾不要。

高野山(茶色)
市尾の1400年
ロンドン
ロンドン
ロンドン
ロンドン

1306

1406 第475図 ロンドン・テムズ川畔から見たハレー彗星(1759年)の絵

『ハレー彗星』小尾信彌

偕成社 1986年1月(6刷)発行 27頁参照

251P

天空を覆った厚い黒雲の西のはずれにハレー彗星が見えたのだろうか。

改訂

・カラー
 ・左頁の下半分に、大彗星の尾を付み出して載せて下さい。

252^P

4,407^P 4/4



252

著作権
 許諾は
 不要です。

1404 写真図版 697 昼間に見えた彗星 (ハレー彗星)
 1304 写真図版 697 昼間に見えた彗星 (ハレー彗星)
 12 1910年1月12日、太陽のすぐそばで輝くハレー彗星のコアは、金星と同様の明るさだったという。
 11 1910年1月12日、太陽のすぐそばで輝くハレー彗星のコアは、金星と同様の明るさだったという。
 10 1910年1月12日、太陽のすぐそばで輝くハレー彗星のコアは、金星と同様の明るさだったという。

・1月の大彗星 (Great January Comet) とも、
 ・尾が2つあるように見える。

お4431^{2/2}「い」と」
1699

④4403³3⁹⁹

4408^P-1/2

④4405¹³13⁹⁹に^{あまぎぬ}雨衣

るまったく性質の違う二つの部分に分けら
る。 (注) 富でない!
という。 (「彗星の話」富田弘一郎、岩波書
店、六頁、一四三頁、一四八頁参照)
[たまりん] 齊明元年五月一日の朝、
都の人々が空中のやや西より見たものは、
地球に大接近した、典型的な姿の彗星
だったのであろう、と観察される。
[大宮人達] は、とてつもなく大きいそ
の青い彗星を見上げ、
[唐] 人が着る青い雨衣を身にまとった
蝦夷が、龍に乗って、葛城嶺の上から都の方
をじろりと見おろしている。✓
と想像したのかも知れない。
[なお、]
「いままでに、昼間見えた彗星は、数える
ほどいかなない」
という。 (「彗星の話」富田弘一郎、岩波書
店、九頁参照)
[少数] ながら、特に明るい彗星や、地球の

「と37」④4426¹

4,408^{P-2/2}

西暦は316年に滅亡
聖年東暦が再興
415, 12, 28 日 ④

三史記 2-309¹
2-320¹

こと

近くを通過しつつある彗星は、昼間でも見え
ることがあるのだから。
①例えは、^{12.5.0m}三國史記百濟本紀、三〇三年条に
「第十代汾西王の」五年（三〇二）夏四
月、ほうき星が昼にあらわれた
とある。
②晋書卷四惠帝紀太安元年（三〇
二）夏四月条にも同様の記事が見られる。
国史記②金富軾東洋文庫平凡社三〇
九頁三二〇頁注三一参照）
百濟と西晋（洛陽）の両地域で
昼に彗星が観測されたのだろう。
③と二つで我々は、日常会話の中で時折
「道路が走っている」
「線路が走っている」
などという。
④無論、道路や線路が自ら走るわけはな

H5.718(回)⑤
→

④4405'69へ

4.409P-1/2

大カンワ 2483P
馬地 はする はる

日本の大(2)読本 249P
④4570P 碩珠

ときおり元
時折 1588P

ものの、細く長く延びて続いている状態を、走
って、いると表現するのであろう。
一例をあげると、日本の歴史(2)飛鳥と奈良、読
売新聞社、二四九頁には、
「左右両郭を、南北に走る道路によって、坊
に分け、東西に走る道路で条に分けた」と
記されている。
そこで、これらと同じように、空中に細長
く伸びていて、龍口や口笠口(雨衣・蓑)の
ように見えるものを、
「馳せている」と書き
表わしているのだと思う。
「龍口や口笠口(雨衣・蓑)」
に見えるものが、大空に細く長く伸びていて、
その端が生駒山の向こうに隠れている様子、
「而自葛城嶺、馳隠膽駒山」
と述べているように推察される。
すなわち、
「彗星の尾が長く走っていて(伸びていて)
その端が生駒山の向こうに隠れていた」と
解される。

4.409^P- $\frac{3}{2}$

④4402^P- $\frac{1}{2}$ 本行
↓

なほより詳く述べると、
大和国飛鳥の板蓋宮の上空に、彗星が姿
を現わした時、
・タイプIIの尾（ガスから成る真直ぐな尾）
・タイプIIの尾（ダストからなる）
曲っている尾）
のうちの少くともどちらかの尾の先端部が、
生駒山にかかっていた。✓
のであろうと思われる。

*

4,410^P 改訂 改訂

とこうで、彗星の象徴ともいうべき尾は、常に太陽の反対の方へ向かって伸びている。この現象について、中国では昔から気が付いていたようであり、唐の時代、八三七年に出現した彗星「ハレー」彗星の記録に、「彗星が朝出ると尾は西を指し、夕方に出了るときは東を指す」と記されてゐる。

つまり、彗星が太陽に近づくときは、頭部を先頭に、尾を後方になびかせながら動く。しかし、近日点のところで尾はぐりと向きを変え、太陽から遠ざかっていくときは、尾が先行し、核とコマの頭部をうしろにしながら進むという奇妙な姿になる。

恐らく、斉明元年五月一日の朝、へ太陽は、飛鳥のほぼ南東にあり、一方、地球に大接近した彗星は、飛鳥の上空をほぼ北西から南東方向に太陽へ近づくように進んでいたのか、もしくは全く反対に、ほぼ南東から北西方向へ太陽から遠ざかるように進んでいたのであらう。

全く 次頁 9 行

ちうめつ
五列 2184 P

「ように」 259
4.4.11 P

全 4430 知覚 259
学研「星・星」 9 P

ちかく ち
知覚 1421 P
知覚 500 259

と理解される。

*

ここに注意しなければならぬの

地球が自転しており、二十四時間で一回

というものである。地球上の我々には、地球の自転

について全く知覚されず、天球が、東から西へ、毎日一回転して

ように感じられる。(「学研の図鑑、星・星

座」学習研究社、九頁参照)

なお、彗星は太陽の方向に向かって(あるいは反対の方向に向かって)猛烈な早さで進ん

でゆく。しかし、地球上のある地点から見上げてい

る人間の目には、天球が、わが二十

四時間で一回転してしまふように見えるので

いかに速度の早い彗星といえども、太陽

月・星などと同様

東から西へ動いてゆ

1539年 伝
条件 1089

4405^P 47 伝
563.8.12 伝
夏休みの日

かんち
感 知 500^P
知 覚 前 959

正

H9.2.28(金)
H5.7.19(月)⑥

H3.2.0

お新

4.412^P

く
よう かんち 知 される。
■そこで、五月一日の朝、飛鳥の都のやや
西寄りに見え、太陽が昇るにつ
れて西へ移動し、午後二時
頃か)に至ったとき、その大彗星はすつ
と西のえ、住吉の松嶺(住吉の岡かという)
の上にあり、さらに西へ果て向かって馳せ去っ
ていった。まತ್ತたというところのたろう
も、とも、青明元年(六五五)五月一日に、
朝鮮半島の諸国や唐の国で、真昼に彗星が見
えたという記録はないようである。雲があつ
たとか、太陽の光線が強すぎたとか、気象条
件が悪かったのかもしれない。
米

米

H5.7.20(4)⑤

市4368P-3/2
市4369-1/2 128

天つま
改行

4.413P

井上下228P
化下308P

小畑田 紀下308P-⑤4368P
327P末

655
649
6

条に、

■そーて、^{さいめい}齊明紀元年（六五五）十月十三日

あうう。^{（第八十一）}章へ^{（八十一）}諺言の項において既述

ているが^{（八十一）}詳くは不明に、宮があつたので

コ小畑田（奈良県高市郡飛鳥の地と考えら小

とある。^{（八十一）}この当時すでに、倭国（大和国）の

意し、^{（八十一）}兵士を集めた。宮は小畑田宮を謂うと決

った。^{（八十一）}この夜、興志は宮を焼こうと決

大槻の本の下まで出迎え、先に立つて寺に入

てくるということを聞き、今来（高市郡）の

造営にあたり、^{（八十一）}たか、^{（八十一）}寺（山田寺）の

の興志は以前から倭国にいて、^{（八十一）}寺（山田寺）の

へて逃げ、^{（八十一）}倭国の境に向かった。大臣の長男

蘇我倉山田^{（八十一）}大臣は、^{（八十一）}茅渟の道を

十四日条に、^{（八十一）}茅渟の道を

■六年前の孝徳紀大化五年（六四九）三月二

大和国コ小畑田^{（八十一）}での

瓦葺きの宮殿造営計画——中止

瓦葺きの宮殿造営計画——中止

瓦葺きの宮殿造営計画——中止

瓦葺きの宮殿造営計画——中止

宇治谷下 186^p
 井上下 242^p
 小井 1926^p
 327^p 末
 紀下 329^p 座文
 紀下 328^p

山廣谷、擬造宮殿、之材朽爛者多。遂止弗作。
 とある。
 普通、
 小墾田に宮闕を造営して瓦葺きにする
 とした。しかし、深山広谷の宮殿に造ろうと
 する材は、朽ち爛れたものが多かったので、
 局宮を造るのを中止した
 と解説されている。
 ーがーながら下
 の宮殿に造ろうとする材に
 深山広谷 朽ち爛れたものが多かったの下
 宮殿造営を中止した
 というのは、説得力に欠ける。
 に思われ
 定かではないが、こう解してみた。
 倭国（大和国）の小墾田（後の藤原宮の
 地）でもあろうか）に於て、宮闕を造営し
 瓦を覆って、大倭国の小墾田宮に擬そうと
 すれば、
 深山・畝傍山・耳成山の間に広がる谷部。藤
 原宮の地）に於て宮殿を造ろうと擬する材
 第26回（大和三山のなかにある藤原京）参照

4439P 10所 岡本宮史 紀下328 4439 4,415P

小林 616P (233) 655年 603 52 4458P * 610P 天の宮 180P

特に地中部分の柱に

小堀田宮に用いられて

（六〇三）以後五十二年を経ており、

（六〇三）以後五十二年を経ており、

を移すのは中止された。

ということであつたかも知れない。

* なお、爛 という字には くさる とい

う意味がある。（漢和辞典）小林信明、小学

館へ爛（参照）

＊

のちのあすかのきかもとのみや

後飛鳥岡本宮

齊明元年（六五五）の是の冬に、飛鳥板蓋

宮に火災があつたので、飛鳥川原宮へお遷り

になった。（紀）

しかし、飛鳥川原宮は（都とするには）何か

と不便だったのであろう。

齊明二年（六五六）の是の歳、齊明天皇は

飛鳥の岡本（舒明天皇の故宮）岡本宮の跡

H5.7.21(4) ⑤ 模 = 小林 526P 元 699P
フ 17やきのすい 呼び名
原は、④ 4418 2行 ~

紀下 236P
4,416P

⑤ 5191P

後日本書紀 ④ 4439P ④ 4231P
10行
④ 4429-32

紀下 328P 注 23
229P 注 18

に、更に宮地をお定めになった。
おりから、高麗・百濟・新羅がともに使を遣わして調をたてまつったので、紺の幕をこの宮の地に張って郷食べた。
やかて宮室が建ち、斉明天皇はお遷りになった。宮を名づけて、後飛鳥岡本宮といった。
↑↑↑↑↑ 皇極天皇(「斉明天皇」)は、古の道にのって、政を行なわれたというや(皇極即位前紀)
● 例えは、皇極元年八月一日、天皇は、自ら呪術を行なって雨を降らせになった。(既述)
たむのみね 田身嶺(多武峰)の冠
山(の山頂に冠をかぶせるのに、周れる垣を以って、また、山嶺の上の二つの楓の樹の厚とりに、観(物見台)を建てられたという。

4,417^P-1/2

カ
ト
↑

カ
ト
↑

- ・カラー
- ・右頁上半分に、
限度一杯はみ出して大抵
掲載下さい。

次頁の図



多武峰
平らな
写真
掲載する

(注)
・図 150^P-1/2 ~ 2/2
冠ヶ岳・由良山にて撮影した。
冠ヶ岳
2葉写真掲載した。



吉野山
5万分の1地図
尾「比叅のみね」には
608mとある

130G

14QG

写真図版

698

奈良県桜井市

たむのみね

多武峰 (678.0m)

『日本全国』

神話・伝説の旅

吉元昭治

勲誠出版

2009年1月20日発行 466頁参照

12
の
4

・有明天皇の

後飛鳥岡本宮

の東南約4Kmに聳える秀麗な山である。

264^P

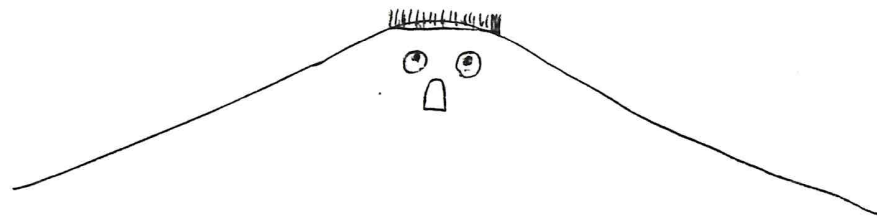
多武峰 468頁

4,417^P-2/2

・左頁の右上 1/4 に
掲載下さい。



・図の下に文字を入れない。
・校正の時にややこしい
から。



1324

第476図

たむのやね かんむり
田身嶺の冠 (想像)

小林885
規 まるまるい
大かん 1198
トハヤシ(くさ)

いまだ 戴く 118
規(ハヤシ) 2699
5192
下328

2号分ア
50-73
0-113
4418

■ 春明紀二年(六五六)是歳条に、
「田身嶺に、冠らゝむるに、
復、嶺の上の両一の櫓の樹の辺に、
起つ。號けて西櫓宮とす。亦は天宮と曰ふ。」
とある。

あるいは、冠を戴いた嶺(田身嶺)
の上の二一の櫓の樹は二一の目に、
鼻に擬されたのであろうか。

参考次に述べると、櫓という字の旁の
「規」には、「まる」・「まるい」という意
味がある。「漢和辞典」小林信明、小学館
△規(参照)

● また、万巻二一四には、
武天皇の第六皇子(弓削皇子)が薨去された時に作られ
たという次の歌が掲載されている。

やすみし(あまつみ) 王(おほきみ) 高光(たかひか) 日の皇子(ひのみこ)
ひさかたの天宮(あまの宮)に 神(かみ) なから 云々

(大意) わか弓削皇子が、今は神上りまし
て、天宮に神として鎮まつておいでになる

ので、天宮を恐れつつしんで、
は夜通し、臥したり坐ったりして、
嘆くけしき

朝日 5.61.3.29(4)
5 file 4419

紀上 2/4
751P

やまのI-13/35
治世 4,419P

749P
750-1/2

高峰 758P

規定 1293P
見まわして 211P

4440P
4447P

天狗 885P
規 885P
規 885P

も、なお、飽き足りない気持でゐる。
*「飽く」は「十分だと思ふ」の意である。(「広辞苑」に「飽く」参照)

(十分でない)

さて、三輪山・多武峰などの山々を阿蘇の外輪山に見立て、また桜井あたりを立野に想

定すると、多武峰に相当する山は、阿蘇外輪山の西端に位置する高峰。今の日冠ヶ

岳(一一五四)である、といえそうだが

すでに第七章へ「天宮」の項において

たように

へその昔

ハツクニシラスメラミコトの

治世中、タクマが原の東方の日冠ヶ岳に垣

の冠が設けられ、目や鼻が付設された

とではあるが、たろうかと述べた

そして、斉明二年に、冠ヶ岳に相当する日多

武峰の山頂に、霊時としての垣の冠が周らさ

れ、目や鼻がつけられた、ということなのかも知

れない。(神武紀四年二月二十三日条参照)

多武峰から見下ろせば、杉木立の間から、

伝承板蓋宮跡等がある。明日香村の中北部を望

(27)

45.7.22 (中)④
→ 46.5.28(生)⑥

83-217^P

4420^P-1/4

2833き
神離
離
元
1890
2066
こと

spil. 4419^P

めろという。(「朝日新聞」昭和十一年三月
二十九日付々刊へ多武峰へ参照)

■なお

「神の離(垣)の意味をもつ」神離は、

往古、神霊が宿つてゐると考えられた山

や森や老木などの周囲に、常磐木を植えめく

らせ下玉垣を結つて神聖を保つた所のことで

あり、神が降下するところと考えられた

という。(「広辞苑」へ神離へ離へ。万

葉集(三)日本古典文学大系、岩波書店、二

七頁、万巻十一一五六五七へ神名火に神離立

てて齋へとも人の心は守り敢へぬものゝ注

記参照)

■あるいは、常磐木によつて囲む神

離は、本来、冠のことであつて、

へ神は、この冠状の神離のところへ降

つておいでになる

と考えられていたのかも知れない。

*

ではなからうか
離 14年

4420-1/4
13行 不明

22

天子の車馬は、いづれも云々。雷鳴云々。297。音云々。454。船運云々。141。
4. 金をつけた。不気味。1325。雷鳴。云々。297。音云々。454。船運。云々。141。
「はいにんにくに」と。65P。お、怪ものか。

一 般 に 聚 々 の 東 方 に あ っ て 目 立 つ 山 は 神 の 朝
 鳴 る 雷 も 降 り ま ー ま せ ー と い う 神 招 き が あ り
 皇 太 神 宮 年 中 行 事 の 神 事 歌 に ー 朝 座 に

都みやこの東方とうほうに聳そびえる田武たむ嶺ののみね（多武峰）の山上さんじょう
 に林立りんりつする神かみ離はなの冠かんむりへ白まかつて、まるで吸すい寄よ
 せうせう小こるかのよう小林 2016 福に奇あやしく光ひかる幾いく筋すいもの稻妻いなづま
 は、どんなにか美うつくしく、巖おごそかに見えたこと
 だうう。
 天あめの下したに轟とどろき渡わたる雷らい鳴めい。そ小こは、神かみの来らい臨りん
 を告つげるものと聞きこえたに違ちがいなし。

のちのあすかのまの
後飛鳥岡
本宮
もとのみや

50分の
地図
多武峯

4.420^p-3/4

ひろうき 1890⁺
佐々木 清

④ 1926⁺
1927⁺

の座とす小たようである
という。〔日本書紀〕(F)日本古典文学大系
岩波書店、三五の頁に九参照。第二十八章
へ立入禁止地区の項において既述
あるいは
へ聚落の東方に聳える山の山頂に、雷を招
き寄せるため冠状の神籬をめぐらせ
これを曰朝座と称していた
のだろうか

*

4,420^P-4/4

記(四)41
記上94^P

「地輪」華育社 62^P
「」小村行雄 33^P

それでは、我國の古代の冠はどのようなもの

(第二十七章 貴人の帽と衣服) 参照

■人物埴輪の頭部に種々の形状の冠がみられる

なかでも最高位の貴人が儀式の時に着用し

た冠は、上端にギザギザのある筒状のものだったのかも知れない

(写真図版 279) へ群馬県高崎市八幡原所出土の

安座する男子像の冠(参照)

なお、古事記に、

冠に成りませる神の名は、飽咋(あまぐひ)宇斯(うす)の

神^{かみ}

とある。(もと日本書紀は、開嚙(あまぐひ)神を禪(はかま)の神とす

る。その意味は不明である)

※

狂心渠
④4429^p 119

④4421^p

同
④4426

10万人④4431^p 3/2
3万人④4444^p 1/2

齊明天皇 601年誕生
紀下328^p 第259

たふれミウのみぞ
狂心渠

齊明紀二年（六五六）是歲条に何と

う記さへていゝ。

時に興事を好む。廻ち水工をて渠穿ら

む。香山の西より、石上山に至る。舟二百

隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控

引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の

人の謗りて曰はく、狂心の渠。功夫を損

費すこと、三萬餘。垣造る功夫を費し損す

と、七萬餘。宮材燦れ、山椒埋小たりとい

ふ。又、謗りて曰はく、石の山が丘を作る。

作る隨に自づからに破れなむといふ。若し

は未だ成らざる時に據りて、此の謗を作せる

か

齊明天皇が、まるで意味のない狂気にみた

大土木工事を行なわれたかのようにも受け取れ

るか。この物語では、従来とは違った

解釈をしてみたい。

＊

モッコ 2019 左下 人海戦術 1142

4,422 - 1/3

溝渠 732 検分 立ち会って抜き見合わせる
656 白紙44 紀下320
-853

紀F329P

12.5-QM
開削地として指定されたところの

白雉四年（六五三）、中大兄・皇極上皇らが
難波宮を後にして、倭の京へ遷られた直後に、
着手されていった。のではなかろうか。
大がかりな人海戦術が採られた。
土を掘り起こし、石や土をモッコに入れて溝
の外へ運び出す三万人余りの人々の
手によって、長く長く続く溝が次第に形成さ
れていった。
それは、かつて神功皇后が溝を穿たれた様
子を想わせるものであった。

斉明天皇は、水工に命じて、長大な溝を穿
らせになった。
香山の西方と石上山（奈良県
天理市の石上神宮付近の山）とを結ぶ、直
線距離でさえ約十二キロもある。大溝渠と
なると、この溝の構想や、地勢の検分などに
ついては、実はすでに、三年前の孝徳

$$4.421^p - 2/3$$

コクヨ ケー20 20×20

与序 → 前概略 - 矢上

神功皇后摂政前紀（仲哀九年四月条）に

こう記されてい

に、既にいて皇后、則ち神の教の驗有る

を識しめて、更に神祇を祭り祀りて、

西を征ちたまはむと欲す。爰に神田を定

めて佃る。時に、河の水を引せて、神田に

潤けむと欲して、溝を掘る。迹驚岡に及る

大磐塞りて、溝を穿すこと得ず。皇后、武内

宿禰を召して、劍鏡を捧げて神祇を禱祈り

まさしめて、溝を通さむことを求む。則ち當

時に、雷電霹靂（雷が急に）はげしく鳴ること

して、其の般を破み裂きて、水を通さむ。

故、時人、其の溝を號けて裂田溝と曰ふ。

とある。

神功皇后になぞうえらるる香明天皇もまた

劍鏡を捧げて神祇を禱祈りまさしめて、溝を

通さしたるのことも知れないや、さううか。

★

「紀」不要

せき 元 1235

こうきょ 小林 589

まこと 鋼 541

233

4.423^{P-1/8}

おもと 麓 1961 *長大な溝を、いっきに作、たと
解する!

トル

な、お、南の香山の方から北の石上へ向か

う、溝を掘った、大雨が降るたびに、溝の

中が雨水で充満し、水を排出するのに年間取る

量ととなる。

○ 斉明天皇が、奈良盆地の東に連なる山々

の麓に沿って南北に掘らせになった溝は、た

ぶん、北側の石上山あたりから、南の

香山の方へ向かい、順次出来上り、つ

たのであろうと思われ。

〔近隣の川から導かれた〕

ついで、その溝の中に水が満たされ、

こうして、帯状の水路が次第に南へ延びてい

った、ように想像される。

また、溝を掘り進んでいる間中も、湿地帯

の埋め立てが進められてゆき、掘り起こした石

を運ばれていったとであつたろうか。

○ そして、斉明二年の溝渠開鑿工事完了後には

香山の西にあった小丘(第四の山)を除去する際に取り出した大量

の石を溝杯に載んだ二百隻もの船が、水路お

(高い位置)

(低い位置)

4421⁸

石上山
4421
-3/3
84
4423⁸
--4/6

429 (205) 8.236

45.7.23 (金) ⑥
49.3.1 (土)
49.11.5 (金)

④4421 2/2 宮の車の山に石を
かきおこす

4423 P-2/6

⑦3815P

④4421 8 「石の山に石を」は、おかないでよい。
こと

に完成した部分の水路を北上し、水の流れ
へ標本あるいは天理あたりを西流している初
瀬川支流の流水か、のままに川を下り、
原の北岸に至った。この大湿
ということなのであろう。
なお、第七十三章八河の水、宮庭に満つ
の項において、
「大雨が降り続き、佐保川が氾濫して
宮庭（奈良盆地北端、春日あたりにあった都
が浸水した為、等々等々大王は耳梨の行
宮（奈良県橿原市木原町）で政事を奏さした
のであろう」と述べてたが、この当時、春日あたりは常に佐
保川が溢れて洪水となる危険性があつたのか
も知れない。
そこで、
山々人々は、先が佐保川沿いの治水を行ない、
宮（平城宮）の東の山に石を重ねて垣とし、
更にまた、湿地帯（奈良盆地北端域の沼）の中

へ佐保川のながれ込みを長大な
 堤防を作ったのであろう。佐保川下流域の堤防を
 築いたのだらう。
 図その後、湿地帯（沼）をや北の方から南の
 方へ埋め立てていった。
 と思われる。（第47図）へ平城京造営工事想像
 図（参照）
 沼の中へいきなり土を投入すれば
 泥濘（ぬみ）状態となり、収拾がつかなくな
 る。
 ・そこで先ず「沼に石を入れて基礎固めを行
 ない」
 ・その上へ、土を盛って、丘【陸】（陸地）にた
 と想像される。
 前記のとおり、石の山か丘を作ると
 とある。

H 30(2018) 10.31(4回) ~ 10.31(4回)
 H 31(2019) 4.12(金) ~ 4.12(3回)
 令和2(2020) 5.28(木) ~ 5.30(4回)

4.423^p - 4/6

元 陸をカ(お)と訓む 西 4421^p 行

15/29
 5/29

北へ運ばれ下陸を作ったのはなかうか
 ・ややニくする為で陸と書かず丘
 と記載したのだろ
 *因みに求ると「陸稲」を「リクタウ」
 とも「ヲカバ」ともいう。(「広辞苑」参
 照)

第四の山を(壊)し
 4421^p 8行
 石上山あたりを通つて